

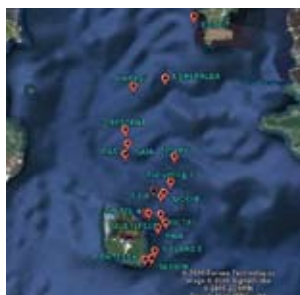
第60回 大島レース

伝統の外洋レース、完全復活

2010年 5月22日(土)～23日(日)



微風の中、初島を目指すスタートする大島レースのフリート



大島レースの「見える化」はこのような形で具現化された。ロールコールで得たポジションを1艇ずつ手作業で入れていく地道な作業

記念すべき第60回大島レースは、5月22日午前11時にスタートした。

大島レースは、葉山をスタートし、初島と伊豆大島を廻る85マイルのオーバーナイトレース。かつては「花の大島レース」と呼ばれ、多くの参加艇で賑わった。

1951年に第1回大会が開催されて以来、日本最古の島廻りレースとして親しまれてきたが、時代とともに参加艇が減少し、一時は開催中止に追い込まれた。

しかし、幸いここ2～3年は参加艇が増加しており、今年は30ftクラスから50ft超のビックボートまで、予想をはるかに上回る22艇のエントリーがあり、久々に賑やかな顔ぶれとなった。

レポート/石丸寿美子(大島レース実行委員会・葉山マリナーヨットクラブ)、写真/濱谷幸江

先行艇は順調、後続はカームに

当日の葉山は朝から東寄りの軽風だったが、スタート直前に南が入り、一転、初島までの第1レグは上りの風となった。

この後しばらくは南の軽風、順風が続く、先頭集団は難なく初島へアプローチ。(ESMERALDA) (SWAN NYA2)から、午後3時前に初島トップ回航のロールコールが入り、同型艇である(ESPRIT)、(KARASU) (KING40)らが順当に続いた。

その後、陽が傾くに連れ風が落ちはじめ、後続は真鶴から初島にかけての無風地帯に捕まり、先行艇団に大きく水を開けられることになった。

初島から大島へのアプローチは過去のレースでも常にターニングポイントとなってきた通称大島への「渡り」レグ。強烈な潮流を避け伊豆半島に沿ってしばらく南下するのが定石だが今回は比較的早い段階でヘディングを大島へ向けた艇が、いち早く北へ東の風を掴んで成功したようだ。しかし、岸寄りの艇団は再び川奈沖で漂うという痺れる展開になった。

大島回航のロールコールでは、先頭集団の顔ぶれは変わらず。ここまでは一度もカームに捕まらずに来た(ESMERALDA)が、2番手(ESPRIT)に1時間以上の差をつけていた。そして「渡り」のコース選択に成功した何艇かが後続として追う展開となった。

なかでも(CRESCENT II) (SENE3)は初島では最後尾の艇団にいたが、ここへ来て一気に6番

手にまで躍り出た。

最終レグでの逆転劇

大島竜王から葉山までの最終レグには大きなドラマが待っていた。

大島回航で2番手と1時間差がついていたトップ艇が、午前6時のロールコールでは入れ替わっていたのだ。竜王崎をかわしてから風が極端に落ち、多くの艇がここで長時間漂ったようだが、東寄りに位置していた順にカームから抜け出し、最終レグでのまさかの大逆転。これで後続も大きく順位が入れ替わった。

7時51分、所要時間20時間51分で(ESPRIT)が逆転のファーストホームでフィニッシュ。修正の結果、IRCクラスの優勝は、竜王崎の無風エリアで差を詰め3番手でフィニッシュした(KARASU)となった。第2位は、惜しくも(KARASU)には届かなかったが、僅差で(Follows) (YAMAHAS3)が続いた。第3位は、(ESPRIT)。

ORCCクラスでは、(TICTAC) (FIRST31.7 TR)が初出場ながら見事優勝し、第2位は(Everything Everything) (JV96 CR)、第3位が(CRESCENT II)となった。

ヨットレースの「見える化」

今回、実行委員会では、身近なツールを使つてのヨットレースの「見える化」を試みた。

写真やリザルトのホームページへの速やかな掲載はもちろんのこと、各ポイントの回航時刻、フィニッシュタイムなどの情報は「Twitter」logなどを通じてほぼリアルタイムで発信し、ロールコールでの各艇の位置情報は、ただちにプロットして公開した。その結果、大会公式サ



ファーストホームの〈ESPRIT〉 (photo by Sumiko Ishimaru)



IRCクラスの優勝艇は〈KARASU〉。竜王崎の無風エリアで差を詰め3番手でフィニッシュした (photo by Kazuyoshi Tanaka)



初出場ながら見事優勝した〈TICTAC〉 (photo by Sumiko Ishimaru)

イトはかつてないアクセス数を記録
 することとなった。
 昨今の海外のビックレガッタで採
 用されているような高性能なトラッ
 キングシステムやライブ映像はなく
 とも、ヨットレースの「見える化」は、
 工夫次第であらゆる可能性があるよ
 うに思う。今まで、一握りの常連艇
 の中だけでおこなわれてきた島廻り
 レースも、この「見える化」を充実さ



外洋レースの隆盛を願う石原慎太郎氏も第60回の記念
 レースに参加。存分にレースを楽しまれたことだろう

せることによって、参加者だけでな
 く、レースの経過を楽しみにしてい
 る人たちにとっても、ヨットレース
 がより身近で魅力的なものとなって
 行くのではないかと思う。
 変化に富む相模湾の地形と、それ
 らに影響される潮流、刻々と変化し
 続ける風、最後まで何が起こるかわ
 からない島廻りレースならではの醍
 醐味。大島レースは、このような魅
 力が濃縮されたレースだ。この伝統
 の外洋レースが、相模湾の定番レー
 スとして今後も発展し、未水く続い
 て行くことを願う。